



Title	留学生を取り巻く環境の改善へ向けて-「長崎大学留学生の修学・生活実態調査報告」から明らかになったこと-
Author(s)	守山, 恵子; 永井, 千香子; 松本, 久美子
Citation	長崎大学留学生センター紀要. vol.9, p.53-62; 2001
Issue Date	2001-06-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/5579">http://hdl.handle.net/10069/5579</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-30T07:04:14Z

# 留学生を取り巻く環境の改善へ向けて

— 『長崎大学留学生の修学・生活実態調査報告』から明らかになったこと—

守山 恵子\*・永井智香子\*\*・松本久美子\*\*

## 1. はじめに

長崎大学留学生センターでは「長崎大学留学生センターの日本語クラスや長崎大学のさまざまな留学生のためのシステム改善に役立てるために、留学生の実態を知ること」を目的に、研究生と大学院生を対象にアンケート調査を行い、2001年3月に『長崎大学留学生の修学・生活実態調査報告』<sup>1)</sup>をまとめた。調査の内容は日本語に関することや専門の研究に関することから、日常生活に関することまで、多岐にわたっている。調査の結果、解決しなければならない問題点や取り組まなければならない課題が明らかになった。本稿では、この報告書で明らかになった留学生の実態について報告するとともに、改善が求められていることについて、今後の方策も含めて、順次考察する。

## 2. 調査の概要

本調査は、1999年12月から2000年2月にかけて、調査票の配布・回収を行った。

質問項目は、研修コース修了生を対象に行ったインタビュー調査<sup>2)</sup>の結果をふまえて、決定した。大まかな内容は以下のとおりである。

1. 国名、性別、専攻といった基本的な情報
2. 日本語の学習状況、使用状況、必要度、困難など、日本語および日本語のクラスに関すること
3. 専門の研究をする上での困難、チューターからの援助など、専門の研究に関すること
4. 大学や公共の設備に関すること
5. 日常生活に関すること
6. 住居に関すること
7. その他

調査対象者160名中64名から回答があり、回答率は40%であった。この調査に回答を寄せた留学生は、調査対象となった留学生全体と比べて、国籍、性別、年齢、母語などの点で、大きな偏りは見られなかった。国別では、最も多いのが中国である。年齢は、対象留学生が研究生および大学院生だったことから、30歳以上が60%を超えた。また、日本政府奨学金、母国政府奨学金やその他の奨学金をもらっている留学生が奨学金を全く得ていない私費の学生の2倍強である。専攻分野については、工学を専攻する留学生で回答を寄せたものの割合が、ほかと比べて多少低かったが、この点についても大きな偏りがあったとは言えない。

### 3. 日本語について

#### 3-1. 来日前の日本語学習について

調査結果によると、来日前にまったく日本語学習をしてこなかった者が58%と何らかの日本語学習をしてきた者よりも多い。また、日本語学習をした者のうち、独習した者が2割を占め、また、週当たりの時間数も5時間以下の者が最も多い。

なぜ、来日前に日本語学習をしなかったかということについては、「時間がなかった」というものが最も多かったが、「必要なし」と考えていたものや「教材がなかった」「先生がいなかった」という者もいる。

来日前に日本語学習をしておらず来日当初は日本語が全く分からない学生が多いということに関しては、大学全体が、このことを十分に理解し、学生が受ける様々なオリエンテーションや情報を得るために読まなければならない書類などの使用言語に配慮をする必要があると思われる。また、指導教官の日本語学習に対する理解など、初級の日本語のクラスに参加しやすい環境を整えることも大切だと思われる。また、来日前に、長崎で研究生活を送る場合の情報が十分であれば、「必要なし」と答える者は減るのではないだろうか。たとえば、インターネットを活用し、大学院の授業・ゼミでの使用言語についての情報や、研究室のほかの学生とのコミュニケーションには日本語が必要であるという情報など、特に受け入れが決まった学生に対しては、日本語の必要度についての細かな情報が役に立つだろう。また、教材があれば、日本語学習をしたいと考えるものに対しては、インターネットの日本語学習サイトの紹介を、留学生センターのホームページで行うことも検討したい。来日前には時間が無くて日本

語学習ができない者に対しても、「ひらがな」「カタカナ」にいくらかでも親しんでおくことを勧めたい。

### 3-2. 来日後の日本語学習について

来日後は留学生センターで日本語学習をした者が83%となっている。また、留学生センターの開講クラスのうち、初級、初中級、中級のクラスで日本語を学んだ者が多く、上級のクラスをとった者はわずかである。

ある程度、留学生センターで日本語学習をした後は、日本語学習を続ける者は少ない。日本語学習が十分でないまま、「時間がない」ために、日本語の勉強ができず、勉強するとしても、自分で勉強するしかない者も多い。

日本語の4技能のうち、話すことがいちばん必要だとした者が最も多く、自分でする場合の勉強方法は、日本人の友達との会話とテレビをあげた者がどちらも約7割にのぼった。日本人との会話のクラスが日本語の勉強で最も効果的であったと答えている者が多いことから、話すことが重要だと考えていることがわかる。都合がいい日本語クラスの時間帯は、どの時間帯もまとまった数の学生が都合がいいとしたが、特に、夜7時以降を選んだものが全体の27%で最も多かった。

留学生の留学の目的は日本語学習ではないので、研究に重きをおくのは当然で、日本滞在が長くなると、専門の研究が忙しくなり、日本語の勉強のための時間がとりにくくなったり、論文を英語で書くため日本語の勉強に時間を費やさなくなり、上級のクラスをとる者が少なくなるのであろう。ただ、2001年度前期に開講しているクラスの登録、出席状況を見ると、上級クラスの出席者は必ずしも少なくない。これまでに、初中級のクラスのコマ数を増やしたり、これまでは、1コマ単位であった中級クラスに週2回開講するクラスを設けたりといった改善をしてきたが、今後も、留学生センターで開講しているクラスが留学生の必要にあっているかどうか、開講時間は適切か、開講コマ数はどうかなどを考えて、改善の努力を続けていきたい。

### 3-3. 専門の研究に関わる日本語について

日常生活では日本語の問題がほとんどないとした者は4割近くに上るが、専門の研究をするときに、日本語の問題がほとんどない者は約2割である。あとの者は、多かれ少なかれ問題を抱えている。

日常生活での日本語の問題として、方言の問題を含むコミュニケーションを挙げた者が多いのに対して、専門の研究の場面では、専門用語の発音や理解に苦労している者が最も多い。

研究室の中での日本語使用状況については、指導教官や研究室の人と話したりディスカッションをしたりするとき日本語が使われることが多い。また、日本語でゼミの発表をする者の方が英語でする者や両方使う者よりも多い。専門書を読んだり、論文を書いたりする場合は英語を使う者の割合が多いが、日本語の専門書を読んだり、日本語で論文を書く者もいる。その際、書いたものをチェックしてくれたり、専門と英語に通じていてアドバイスをしてくれる人からの助けがあればいいと考えている者も多い。

専門日本語の勉強のために、「専門日本語のクラス」と「専門日本語の辞書」が必要だと考えている者は、それぞれ半数を超えている。

専門分野の助けが個人的に必要な留学生のためには、チューターの活用がまず求められるだろう。(チューター制度については後述) また、これまでも各研究室が必要に応じて留学生をバックアップしてきているが、バックアップ体制が確立されて、留学生自身が、研究室でのバックアップ体制を十分に理解すれば、それだけで、精神的な負担が減るだろう。

「専門日本語のクラス」については、留学生センターのみで対応するのには限界がある。学部や研究科によっては、他大学でもしばしばなされているように、留学生のための「専門日本語のクラス」を開講しているところもあるが、クラスを開講するにしても、個人的に各研究室で対応するにしても、留学生の要求にあった対応が必要だろう。留学生センターでは「専門日本語の辞書」の作成や、留学生が使いやすく、役に立つ用語検索サイトの紹介をしていきたいと考えている。

#### 4. 専門の勉強について

研究生活で困難を感じていることのほとんどは、日本語力の不足に起因しているようである。

日本語力不足に起因する問題以外に問題を抱えている者は少数であるが、文化的な相違に起因して、日本人の考え方が理解できなかったり、日本的な研究室のシステムやゼミのやり方になじめなかったり、人間関係、いじめなどの問題を抱えている者もいる。

専門の研究生活に関することで問題があった場合には、指導教官に相談するとした者が最も多く、次いで同じ研究室の人に相談しているものが多い。また、留学生センターの教員に相談をしている者もいる。

指導教官や同じ研究室の人に相談しにくい場合に、留学生センターまで足を運ぶと考えられる。相談しにくい場合というのは、留学生センターで相談を受けてきたこれまでの経験から言えば、指導教官や同じ研究室の人がとても忙しそうに相談を持ちかけられない雰囲気がある場合や、内容的に、同じ研究室の人には言いにくい、誰かに聞いてもらいたい場合、留学生センターの教員が情報を持っていると考えた場合などがある。

留学生が抱えている問題のうち、日本語力以外の問題は、深刻な問題に発展する懸念もあり、今後、留学生センターと指導教官をはじめとする研究室の人々とのコミュニケーションを深め、連携体制を整えていく必要があるだろう。

## 5. チューターについて

大学院生及び研究生の場合、最初の1年間にチューターが配置されることになっているが、調査結果によると約40%が「チューターがいない」、もしくは「いなかった」と回答している。また、チューターの配置期間に関しては、40%が規定の期間を大幅に下回っている。

チューターの配置と期間に関しては、「チューター継続期間・年度別表」をみると、チューターオリエンテーション<sup>3)</sup>やチューターマニュアル<sup>4)</sup>の整備とともに、改善されてきているようである。

次にチューターによるサポート内容であるが、日本語や専門の研究に関するだけでなく、人間関係や日本社会の説明なども含め、日常生活全般にわたっている。

定められた期間チューターが「いなかった」原因としては、特にチューターが同じ研究室の学生である場合、チューターが留学生に対して、自分がチューターであることを名乗らなかった可能性がある。また、チューターが半年で交代する場合もあるので、半期はチューターが誰かわかっていたが、半期はわからなかったという場合もあるだろう。研究室全体で留学生をサポートしている場合もあるが、やはり、チューターが誰であるかを明確にしたうえで、指導教官と研究室全体でサポートしていく体制がとられるのがベストであろう。

チューター制度は、チューターが留学生と日常的に接触することで、留学生が抱えている問題点を早期に察知し、個人個人に対応した援助が行えるという点で、大きな意義がある。誰に尋ねたらいいかわからない問題が起きたとき、どんなことでもさしあたってチューターに聞く者もいる。身近に気楽に相談できる人がいるということは、留学生にとっても、大きな安心となるだろう。

今後とも、チューターを日常的な窓口に、留学生の指導教官を初めとする研究室のメンバー、及び留学生センターの教員、学務部留学生課のチューター担当者、各学部の留学生指導主事など、留学生をサポートするための学内ネットワークがよりうまく機能していくように連携体制を工夫、強化していく必要がある。

## 6. 日常生活について

### 6-1. 困っていることとその解決法

「日常生活で困ったこと」は来日当初もアンケートに答えた時点でもいちばん多いのは「ホームシック」であることがわかる。「ホームシックをどうやって乗り切るか」という質問に対しては、「国へ電話やメールをする」という回答が一番多かった。

これは、家族の関係が日本より密接な国から来ているものが多く、また、配偶者や子供を母国に残しているものも少なからずいるからであろう。国際電話については最近、非常に安く国際電話ができるプリペイド式のカードが多数出回るようになった。また、多くの留学生がメールやチャットで家族や友人とやり取りをしたり、デジタルカメラで撮った写真を送ったりしているようである。また、インターネットを通して国の新聞を読んだりすることもできる。ホームシックによるストレスを解消するという点に関しては今の留学生は数年前に比べて恵まれていると言える。

そこで、留学生にインターネットにつながったコンピュータが使いやすい環境を提供する必要がある。インターネットにつながったコンピュータは、研究室に所属している院生や研究生、学部生は研究室で使える環境にあり、あまり問題がない。しかし、まだ研究室に所属する前の学部の1、2年生や留学生センターに所属している国費の留学生などが自由に使えるコンピュータを整備する必要がある。長崎大学の場合、付属中央図書館の留学生コーナーに留学生が優先して使えるコンピュータが設置されている。留学生センターも留学生コー

ナーのコンピュータの台数を増やすことに協力した結果、2001年5月現在コンピュータの台数は9台となった。しかし、まだその台数は十分とは言えない。今後もパソコン環境の整備につとめる必要がある。

## 6-2. 国際交流団体の活動への参加

「国際交流団体の活動に参加したことがありますか」という質問に対して「はい」と答えた学生はアンケートに答えた留学生の75パーセントを占める。「前問で「はい」と答えた人はどの団体ですか」という問いに対しては「地球館」がいちばん多かった。

「地球館」は同じ興味や趣味を持つ日本人と外国人がさまざまな交流を日常的に行う国際交流団体の活動拠点である。市の指定文化財である洋館を借り受け1997年に発足した。アンケートの結果からも「地球館」が留学生が集まる場所として地域に根付いてきていることがわかる。

「どのような活動に参加したか」という問いに対する回答として「地球館」の活動である「スポーツ」、「料理」、「ピクニック」と答えた学生の数それぞれ約20名である。「地球館」を利用すると答えた学生が25名で、「料理」、「ピクニック」と答えた学生の数とはほぼ同数で並んでいることから1人の留学生が「地球館」が主催する複数の活動に参加していることが伺える。日本での生活を充実したものにするという面での、地域の国際交流団体が果たす役割は大きい。

「どのような団体の活動に参加したか」という問いに対する回答で「地球館」に次いで多かったのが「長崎県国際交流協会」である。

これは、「長崎県国際交流協会」が主催するホームステイがプログラムに組み込まれた小中学校の児童・生徒との交流会や、毎年秋に同協会が行っている「留学生ホストファミリー交流プログラム」に参加する留学生が多いからであろう。

現在のところ、ホームステイやホームビジットに関してはそのほとんどを「長崎県国際交流協会」主催の「留学生ホストファミリー交流プログラム」（年1回）に頼っている状態である。毎年11月に留学生とホストファミリーのマッチングが開催されるが、これだけでは4月来日の留学生の依頼に対応できない状態である。そこで、今後の課題はホームステイやホームビジットがしたいという留学生の依頼を受けたら、すぐにその要望にこたえることができるような



長崎大学独自のホストファミリープログラムをたちあげることである。

### 6-3. 住居について

「どんな住居に住んでいるか」という問いに対する回答でいちばん多かったのは「アパート」である。そして、「これまでにどんなところに住んだことがあるか」という問いに対して「国際交流会館」<sup>5)</sup>と答えたものが46名と多い。

「アパートをさがすときに問題があったか」という問いに対して半分の者が「はい」と答えている。「具体的にどのような問題か」という問いに対して最も多いのは「家賃の高さ」である。ついで「抽選もれ」、「外国人お断りと言われた」と続く。また、「長崎に来てから一番悲しかったことは何か」という問いに対して2名のものが「外国人お断りと言われたこと」をあげている。

長崎は土地が狭く坂が多い。そこでどうしても家賃が九州の他の県に比べて高くなると言われている。長崎で学ぶ留学生にとって、特に私費留学生にとってはこの家賃の高さが生活を脅かすものとなっていることが伺える。やはり、入居期間が限られていても<sup>6)</sup>敷金も礼金もなく家賃が非常に安い国際交流会館は留学生にとっては魅力のある施設だと思われる。

「抽選もれ」とは県営アパートと市営アパートの抽選のことであるが、長崎市には単身用の公営住宅はない。従って抽選にもれたことをあげているのは家族を伴う留学生である。単身の留学生に比べて何かと出費が多い家族を伴う留学生が礼金も敷金もなく、家賃が安い公営住宅に入りたいと思うのは当然のことであるが、現実には何回申しこんでもだめだったという留学生の話をよく耳にする。

家賃の高さ、公営住宅への入居の難しさ、外国人に対する差別など住居に対するさまざまな問題がこの調査からわかった。現在、長崎大学で留学生の住居の問題に関して実施していることには以下のようなことがある。

まず、火災保険に加入するということを条件に長崎県国際交流協会が民間のアパートに入居する際に保証人になるという機関保証の制度が始まったことである<sup>7)</sup>。また、長崎大学外国人留学生後援会<sup>8)</sup>が留学生のために生協の火災共済の掛け金を負担する制度もある。さらに、企業の寮の一部を留学生のために提供してもらうなどの取り組みも行われている。この問題解決には貸す側と借りる側の双方の理解が不可欠である。アパートを探すときから退去までについて詳しく説明したマニュアルを作成するなど、一層の取り組みが必要であると

思われる。

## 7. おわりに

調査の結果、留学生の修学上、生活上の問題点や課題が明らかになった。留学生センター独自で着手することができる課題については、たとえば、前述のとおり、日本語のクラス編成を変更するなどの改善を行ってきた。また、『留学生センターニュース』<sup>9)</sup>などを利用し、相談体制の全学への周知に努力している。さらに、さまざまな印刷物<sup>10)</sup>を発行して、留学生の支援体制を整備している。今後もさらに改善への努力を続けていきたいと考えている。

しかし、センター以外の部局や教職員との連携が必要な事項については、各部局の留学生指導主事との会合がもたれ連携へ向けての一步が踏み出されたものの、改善が進んでいるとはいえない。今後、これらの課題について、留学生の負担を軽減するためにも、検討を重ねていきたい。

また、本調査は、留学生の側から見た実態を調査し、問題点を明らかにするためのものであったが、研究室で日常的に留学生と接している日本人学生などを対象として、視点を変えた調査も実施したいと考えている。

## 註

- 1) 守山恵子・永井智香子・松本久美子 (2000) 『長崎大学留学生の修学・生活実態調査報告』長崎大学留学生センター
- 2) 研修コース修了生を対象に行ったインタビュー調査については、守山恵子・永井智香子・松本久美子 (2000) 「留学生の求めていることー研修コース修了生インタビュー調査報告ー」『長崎大学留学生センター紀要』第8号pp.1~30で報告している。
- 3) チューターオリエンテーションは1998年度から留学生課の協力を得て、留学生センターで行っている。
- 4) オリエンテーションを始めた1998年から毎年チューターマニュアルの改訂を重ね、今年度は以下のものを使用している。長崎大学留学生センター (2001) 『チューター制度についてー制度の概要と、チューターの心得ー』第4版
- 5) 「国際交流会館」は長崎大学の外国人研究者および留学生のための宿泊施設である。

- 6) 「長崎大学国際交流会館規則」では、国際交流会館の入居期間は1年以内となっている。「長崎大学国際交流会館使用細則」では、延長を認める入居期間も1年以内である。
- 7) この機関保証の制度は2001年4月より始まった。
- 8) 長崎大学外国人留学生後援会は留学生の支援を目的として、1985年12月に設立された。その財源は会費収入とその他の寄付によっている。
- 9) 留学生向けに、新しく開講されるクラスの案内や留学生に役に立つ情報、留学生の書いたエッセイ、などを掲載した『留学生センターニュース』を年2回発行している
- 10) 留学生センターでは『留学生センター案内ー日本語教育と留学生相談ー』を年1回発行している。また、『留学生のための長崎生活ガイド』第2版（英語版および中国語版）が2001年4月に発行された。このほか種々の冊子、日本語教育教材などを作成・発行している。

(\*留学生センター講師、\*\*同助教授)